騒擾のオランダ　幕末京都で描かれた再洗礼派蜂起と八十年戦争

塚原　晃

本稿は幕末の京都で活躍した銅版画家、松本保居（初代玄々堂、一七八六～一八六七）と岡田春燈斎（生没年不詳）によるふたつの西洋市街風景図とその西洋製原図について紹介するものである。これらには画題などは一切記されておらず、描かれているのがどこの都市の、どのような歴史的事象なのか、まったく知られていなかった。本校では、その本来の主題が、十六世紀ネーデルラントの再洗礼派蜂起と八十年戦争の場面であることを実証し、これを模した幕末京都の銅版画家が目にしていた可能性のある舶来書籍についても言及する。

一　潰え去る神の国

「市街戦闘図」と仮称する銅版画作品がある（図1）、画面内法量は一六・七×二五・六センチ、紙本銅版墨摺）。画面左下隅に款記「玄二」が見られ、同様の款記をもつ作品との類似性から、初代玄々堂・松本保居の作と考えられる。保居の銅版画作品としては、かなり大振りな作品である。描線の強弱を巧みに使い分けて風景の遠近感を表出する、保居による天保・弘化年間（一八三〇～四八）の代表的な風景版画である。

ここに描かれているのは、かなり高い尖塔をもつ建築が面する広場だが、その雰囲気はかなり切迫している。土嚢のようなもので封鎖された街路、銃や軍旗を持った隊列、尖塔の建物を狙うかのように配置される大砲。彼らは圧倒的な武力でこの建物に立てこもる敵をじわじわと追い詰めているようだ。広場では、負傷者や遺体が引きずられたり、捨て置

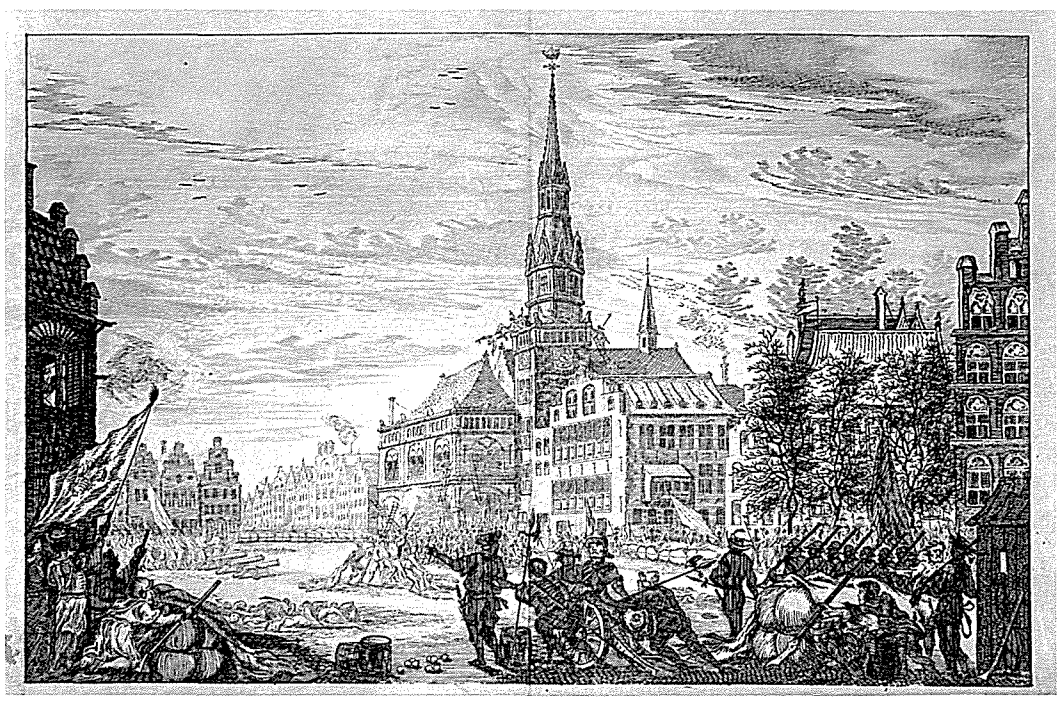

図1　松本保居「市街戦闘図」天保・弘化年間（1830～48）　神戸市立博物館蔵

かれている。武装した人々がこの建物に梯子で侵入を試みたり、尖塔のバルコニーに殺到している。彼らに押し出されるように塔から転落する人影も見えている。

何らかの西洋製版画に基づく銅版画であることは想像されてきた。その原図が特定できない間、筆者はヨーロッパの主要都市の中心部にそびえる教会建築の写真などを集めて、この阿鼻叫喚の巷がどこなのか突き止めようとしたが、徒労であった。何故なら、この尖塔の建物は十七世紀に消滅し、現在この場所は見違えるような景色になっているためである。

先に種明かしをすると、これはオランダのアムステルダムの中心・ダム広場の古い景観である。歴史を知る地元の人々なら、即座に判別できる街並みだが、我々日本人には馴染みの薄い歴史的風景なので、冗長ではあるが原図と比較しながら説明する。

筆者が見出した、ほぼ同構図・同内容のオランダ製原図（十八世紀の銅版画家サイモン・フォッケ画、エッチング、一五・四×一九・七センチ。図2ニ）を紹介する。画面を構成する主要モチーフはほとんど一致しているが、画面縦横比率は異なり、右中景部の建築の描写が松本保居「市街戦闘図」では右方に四分の五ほど拡張されて描き足される形となっている。この描き足された部分だが、後述する図6の別の都市風景を描く版画の右三分の一の部分を転用し、このダム広場の風景に融合させるという、かなり複雑な構図の組み立てを行っている。それ以外の細部においても景物の変更点が随所に見られる。画者の松本保居が、単一原図の写しではなく、自己流のアレンジを加えることで、このダム広場の光景を再構成したことは明白である。とは言え、「市街戦闘図」とこのオランダ製銅版画との強い相関性は明らかで、後者を手がかりに前者に描かれた建物と事件の素性は特定可能となる。

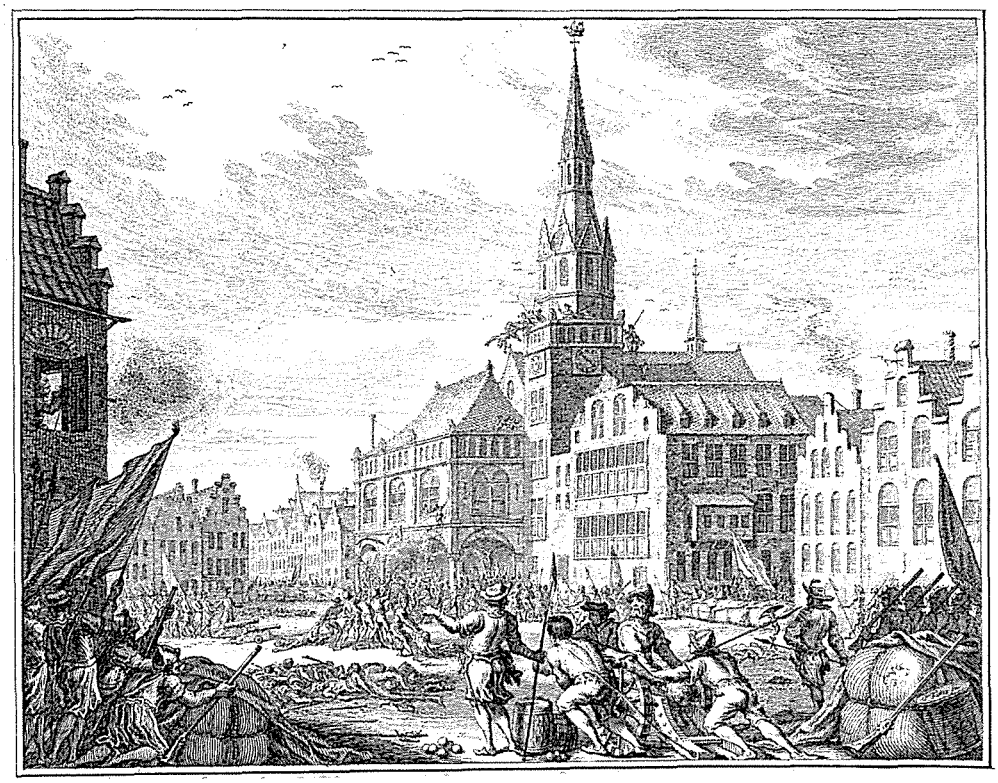

図2　サイモン・フォッケ「1535年、アムステルダムでの再洗礼派の蜂起の失敗」
1751～81年　アムステルダム国立美術館蔵

図3　「アムステルダム市庁舎」1601～12年頃　アムステルダム国立美術館蔵

所蔵先のアムステルダム国立美術館にはこれとほぼ同図柄で画面下余白に題記をもつ異版作品がある[二]。その題記は「Mislukte aanslag der Herdooperen op Amsterdam, in't jaar 1535」で、邦訳すると「一五三五年、アムステルダムでの再洗礼派の蜂起の失敗」である。「再洗礼派」とは、十六世紀前半の「宗教改革」で生まれた勢力のひとつで、自らの意志による信仰告白を公に行った成人のみが洗礼を受けるべきと主張し、幼児洗礼をはじめとするカトリック教会の典礼や権威を否定する宗教運動を展開した。その最たるものが、神聖ローマ帝国の都市ミュンスターの統治権を奪い、最終的には王政を築くに至った事件（一五三五年六月に鎮圧）で、同時に下ライン地方やネーデルラントで蜂起を誘発し、苛烈な弾圧と殉教の嵐を呼ぶことになる[三]。そのひとつが本図に描かれているアムステルダムでの再洗礼派の蜂起と鎮圧である。

一五三五年当時、現在のオランダなどを含むネーデルラントはハプスブルク領で、カトリック以外の異端的宗派は摘発の対象となっていた。急速な経済発展にあった北部諸州では、プロテスタント（改革派教会）はまだ浸透していなかったものの宗教的に寛容な傾向が強く、多くの再洗礼派を呼び寄せることとなった。その中心都市・アムステルダムに新たな神の国を築くため、一五三五年五月十日から十一日の夜、再洗礼派の過激分子が市庁舎を占拠し市長が殺害された。翌日この蜂起は制圧され、以後多くの信徒が公開処刑されるなど、アムステルダムでも再洗礼派は厳しく弾圧されるに至った[四]。

図4　図1・2と同じ方角から望む、17世紀以降のダム広場の景観。右側の建築が新市庁舎（現在の王宮）。ヤン・カスパル・フィリップス「アムステルダム市庁舎と計量所のあるダム広場」（部分）1743～44年　アムステルダム国立美術館蔵）

十七世紀初頭に制作された別の銅版画に描かれた市庁舎（Stathuys）の全景（図3）や十七世紀までのアムステルダムを描いた鳥瞰図に見られるダム広場の表現[五]と比較から、玄々堂本・フォッケ本ともに見られる、中央の尖塔を持つ建物が、再洗礼派に乗っ取られたアムステルダム市庁舎であることは明白だ。その周囲に展開しているのは市当局側の兵員で、すでに市庁舎への突入と再洗礼派の排除が強行されているのだろう。なおこの市庁舎は一六五二年に焼失、その跡地を含む広大な街区を

一掃する形で出現した巨大な古典主義様式の建築が、一六五五年から新しい市庁舎として機能を始める（十九世紀以降は王宮に転用）。ダム広場の景観はこうして刷新され（図4）、四世紀近くを経て今日に至っている。

二　裏切りの街角

一五五六年、ハプスブルク家の皇帝カール五世より譲位された息子が、フェリペ二世としてスペイン王に即位した。これによりネーデルラントはスペイン領となるが、この新しい領主による苛烈な統治は、所謂「八十年戦争」を一五六八年に勃発させる。結果として北部ネーデルラントの反乱軍はオランダ（ネーデルラント連邦共和国）として独立を勝ち取るのだが、当初スペインとの戦いは劣勢を強いられ、一五八五年よりイングランドからの支援を仰ぐことになる。

そのイングランドは、プロテスタント的なエリザベス一世を君主とし、スペインと対立関係にあったとはいえ、反乱軍を一心に援助できたわけではなかった。ネーデルラントに派遣された軍人の中には、密かにスペイン軍に内通し、反乱軍に打撃を与える者もいた。次に紹介する岡田春燈斎画「西洋市街図」と仮称する銅版画（画寸十三・六×十九・二センチ、図5㊤）の本来の主題は、北部ネーデルラントで起きたイングランド軍将校の背信行為である。

本図画面下余白の欧文「Suntooesai Woetoeci. MOEMA NO231 BAN Soeigetoedoo ban.」は、他の岡田春燈斎に銅版画に見られる例から「春燈斎写　午二三一番　水月堂版」の意と解釈できる。岡田春

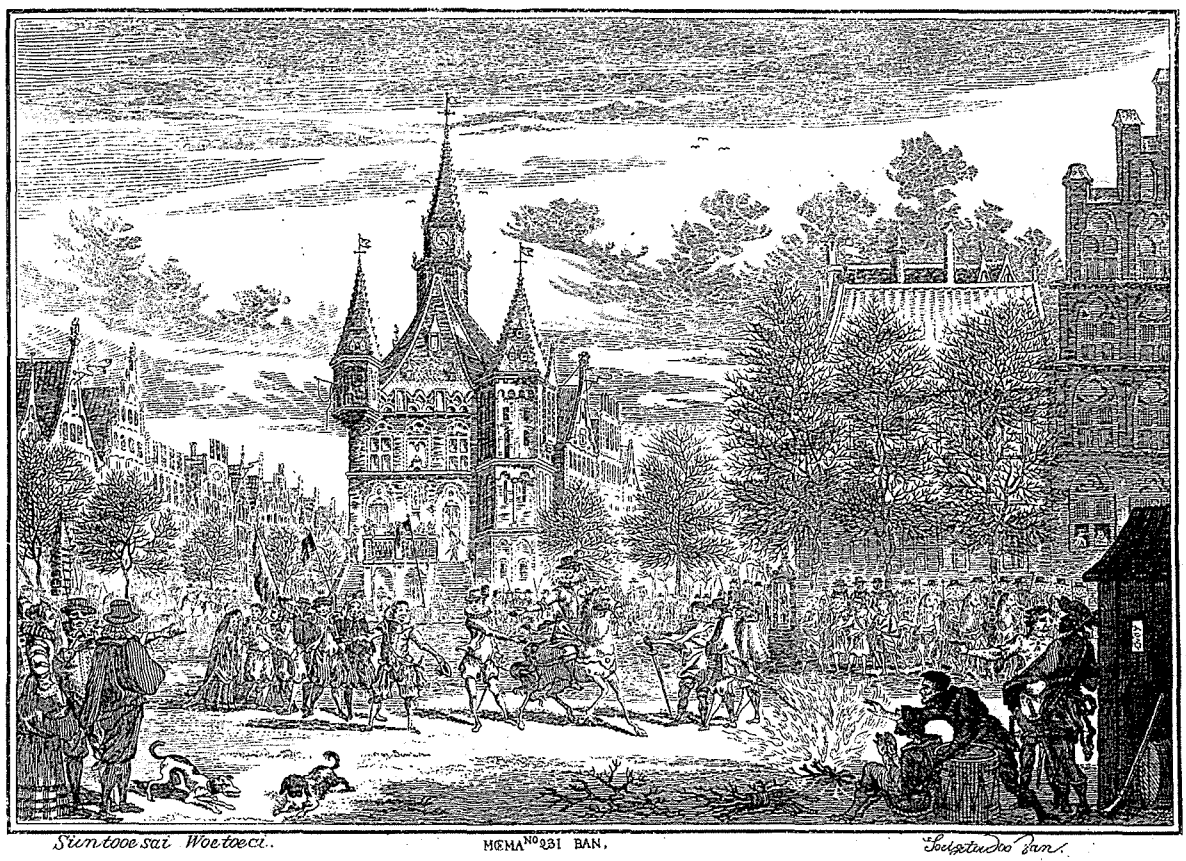

図5　岡田春燈斎「西洋市街図」安政5年（1858）か　杜若文庫蔵

燈斎は初代玄々堂・松本保居に遅れて幕末期（嘉永～文久年間）の京都で活躍した銅版画家で、伝記未詳にもかかわらず、当時の京都銅版画でその作品数は突出している。中には本図のように、描線の強弱を巧妙に描き分けて遠近感や明暗を表出するなど、先述の松本保居「市街戦闘図」と甲乙つけがたい作例もあり、技術継承の面で保居との深い関係が想定されている。

ここに描かれているのは、ヨーロッパのある街角。画面中央に3つの尖塔が特徴的な建物がそびえており、その周辺の広場がなにやら騒然としている。騎馬兵団と思われる集団に取り囲まれた広場の中心では、白馬にまたがった人物が何かを訴えているようだ。これを見て、困惑した顔つきで話し込む男女や、銃を持つみすぼらしい兵士の姿が、濃い陰影で描かれた前景部にたたずむ。

この市街風景について、オランダのハウダ（Gouda）の市庁舎周辺とする説[七]があったが、正しくは、オランダ中部の都市・デーフェンター（Deventer）の計量所とその周辺のブリンク広場であることを本稿をもって確定したい。オランダ最古の計量所ともいわれるこの建物は、今は歴史博物館として転用されている[八]。現状では尖塔がドーム型の屋根となっているが、基本的な建築外観は本図とほぼ同じである。

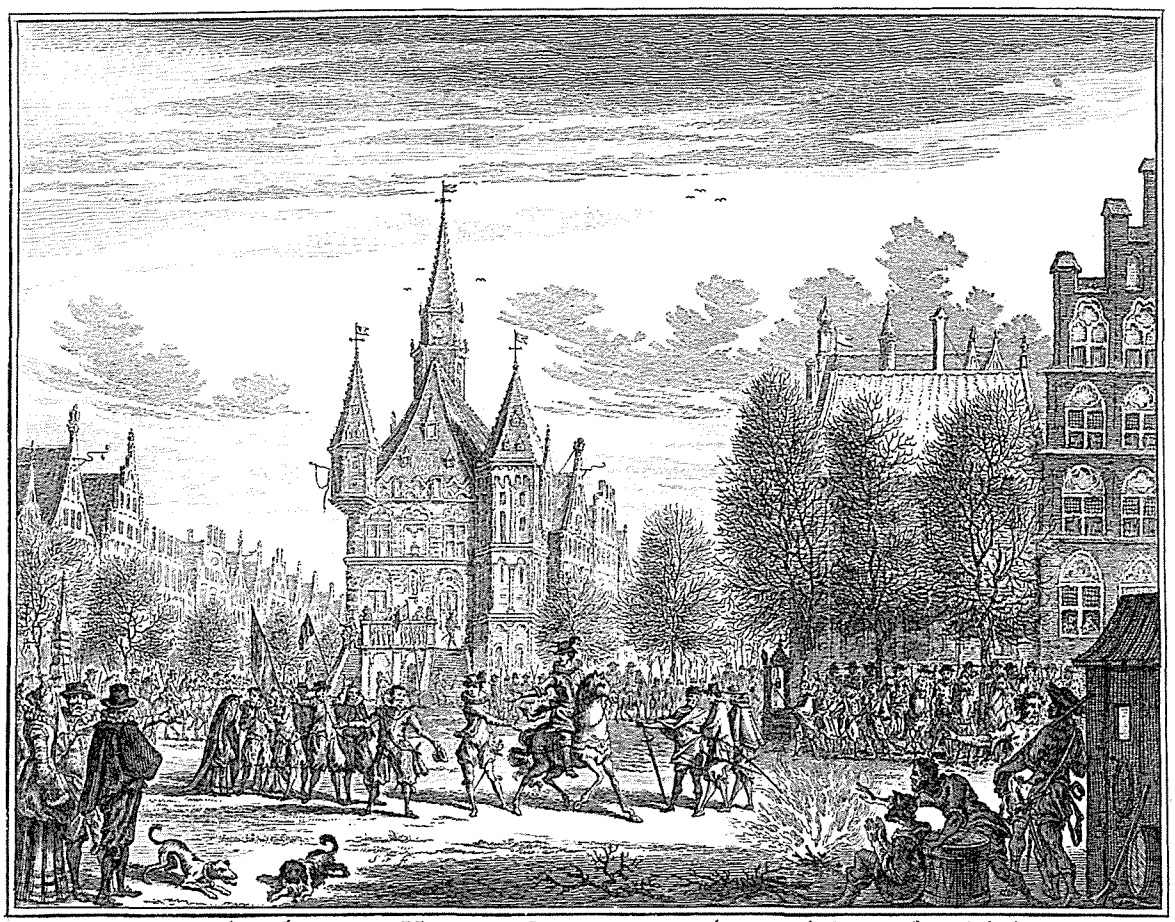

図6　サイモン・フォッケ「1587年、ウィリアム・スタンレーの裏切りによりスペインに引き渡されたデーフェンター」1729～66年　アムステルダム国立美術館蔵

右のごとき岡田春燈斎「西洋市街図」の景観特定の根拠となるオランダ製銅版画（十八世紀の銅版画家サイモン・フォッケによるエッチング、一七・六×二二・四センチ。図6ㇷ）を紹介する。画面下部に「Deventer, door den Overste William Stanlei, verraaden aan de Spaanschen, in't jaar 1587」、つまり「一五八七年、ウィリアム・スタンレーの裏切りによりスペインに引き渡されたデーフェンター」という題記がある。

ウィリアム・スタンレー（一五四八～一六三〇）十は、イングランド軍将校として一五八五年にネーデルラントに派遣され、反乱軍を支援するため対スペイン戦に従軍するが、スペインへの内通、エリザベス一世暗殺計画にも関与したとされる人物である。彼はイングランド帰国を終生許されなかったが、その要因のひとつが本図主題の背信行為である。デーフェンターの防衛にあたっていたスタンレーは、一五八七年一月にこの街をスペイン軍に引き渡し、自らもスペイン軍に合流してしまった。本図中央に描かれている騎乗の人物がスタンレーで、広場を囲む軍勢や市民の前で、この街がスペイン軍に制圧されたことを宣言しているのだろう。

三　終わりに　―幕末京都への『愛国史』伝来の可能性

以上判明したこれらのオランダ製銅版原図の歴史的背景について、松本保居と岡田春燈斎はどれだけ汲み取ることができたのだろうか。保居「市街戦闘図」は天保・弘化年間（一八三〇～四八）、春燈斎「西洋市街図」は安政五年（一八五八）の制作と推測される。アヘン戦争の実態を紹介した『海外新話』が即座に発禁になったように、この時代の日本で海外の戦争をストレートに描き伝えることは容易ではなかった。その幕末期の京都において、十六世紀の黎明期オランダの動乱を主題とする舶来図版をもとにして銅版画が制作された意図は、奈辺にあったのだろうか。これは、風変わりな異国風景図に過ぎないのか、それとも、なんらかの政治的意図やメッセージが込められているのだろうか。

松本保居・岡田春燈斎がこれらの銅版画を描く際に模した原図は、いずれも十八世紀のオランダの銅版画家サイモン・フォッケの制作で、その作風や画面形式は非常に近似している。これらを紹介しているアムステルダム国立美術館のウェブ・アーカイブによると、これらはオランダの歴史家 Jan Wagenaar による二十一巻本の歴史書 "Vaderlandsche historie"（『愛国史』）の挿図として制作されたという。実際、「一五三五年、アムステルダムでの再洗礼派の蜂起の失敗」はその第五巻、「一五八七年、ウィリアム・スタンレーの裏切りによりスペインに引き渡されたデーフェンター」は第八巻に収録されていることが確認できる十一。松本保居と岡田春燈斎が模した原図が、二枚の版画だった可能性も否定はできないが、この歴史書は舶来して京都までもたらされ、この二人はその挿図を目にした可能性も高い。『愛国史』本文の該当箇所の記述によって、これらの銅版挿図の主題、アムステルダムの再洗礼派の蜂起およびウィリアム・スタンレーの裏切りという歴史的事件が、少なくとも十八世紀のオランダでどのように解釈されたかが解明できるが、本稿ではその読解までには至らなかったので、他日に期したい。

註

一　アムステルダム国立美術館蔵。所蔵番号 RP-P-OB-78.516。

二　アムステルダム国立美術館蔵。所蔵番号 RP-P-OB-50.764。

三　「再洗礼派」と「ミュンスターの反乱」に関しては、次の文献を参照。
倉塚　平『異端と殉教』（筑摩書房、一九七二）
A．E．マクグラス著・高柳俊一訳『宗教改革の思想』（教文館、二〇〇〇）

四　アムステルダムの再洗礼派の蜂起については、【三】の倉塚文献の他、次の文献を参照。
Gary K. Waite [The Anabaptist Movement in Amsterdam and the Netherlands, 1531-1535: An Initial Investigation into its Genesis and Social Dynamics] The Sixteenth Century JournalVol.18, No.2 (Summer, 1987), pp. 249-265Jaap Geraerts [The prosecution of Anabaptists in Holland, 1530-1566.] Mennonite Quarterly Review, Jan 1, 2012

五　たとえば、一六二五年の「アムステルダム図」（アムステルダム国立美術館蔵、所蔵番号 RP-P-1892-A-1749ID）によると、鳥瞰図的に表されたダム広場にこの市庁舎の建物が描かれている。

六　本稿で写真掲載する杜若文庫所蔵本のほか、これと同版の大英博物館本（所蔵番号 1904,1122,0.14）がある。

七　John Clark, edited by Tim Clark [Japanese Nineteenth-Century Copperplate Prints] British Museum Occasional Paper No. 84 (1994) P30の、六の作品解説を参照

八　デーフェンターの計量所と博物館（Museum de Waag）については、その公式サイト（https://museumdewaag.nl/de-waag/）を参照。

九　アムステルダム国立美術館蔵。所蔵番号 RP-P-OB-50.769

一〇　ウイリアム・スタンレーの経歴については、本稿では英語版・オランダ語版の Wikipedia を参照した。

一一　Google Books に公開されている『愛国史』（ミシガン大学本・オランダ国立図書館本）で確認。